

## 承前

突然、先頭を走ってきたゾンビが立ち止まり、くるっときびすを返した。

「いったい、何が起こったんだろう。とっさに事態が飲み込めず、翔平はただその様子を見守るしかなかった。」

すると、ゾンビたちは続々と方向転換をし始めた。たちまちゾンビ溜まりができたが、全員、黙ってたたずんでいる。まるで翔平たちを護っているかのようだった。

後続のゾンビたちが追いついてきた。

「行っけー！」

美亜は、陽気なかけ声をかけると、戦国武将が采配を振るように大きく手を回す。

それを合図にしたように、方向転換したゾンビたちが、後からやってくるゾンビたちに向かって突進した。

寝返ったゾンビたちは、敵のゾンビたちに襲いかかり、首筋に食らいついたり目潰しをしたりして引き倒す。

敵のゾンビたちも、まるっきり智能がないわけではないわけではない、新しい状況に適應して、応戦を始めた。お互いに恐怖を知らず痛みも感じていないのか、我が身の状況は顧みずに、ひたすら相手の身体を損壊することだけに熱中していた。

血飛沫が上がり、あちらこちらにちぎれた人体の部品が転がった。だが、聞こえるのは唸り声

だけで、誰一人悲鳴を上げたりはしない。

翔平は、啞然あぜんとしていた。それは、まさに地獄絵図だった。超能力者が出現して以来、信じられないような恐ろしい出来事の連続だったが、まさか、こんなことが起きるとは、こんなものを実際に見る羽目になるとは、夢にも思っていなかった。

それから、はっと気がついて、子供たちの方を見やった。梨奈りなと拓海たくみは、ぽかんと口を開けたまま、スプラッター映画に熱中するように凄惨せいさんな光景を眺めていた。

「見たらだめだ！」

翔平は梨奈と拓海を腕の中に抱きしめて後ろを向き、ゾンビ同士の殺し合いを見せないようにした。しかし、二人とも、怖いもの見たさからか、ともすれば翔平の身体の陰から顔を覗のぞかせようとす。そのたびに、子供たちの頭を引き戻さなければならなかった。

その間に、状況はますますグロテスクになっていった。

互いの尖兵たちが相討ちになって斃たおれると、次に押し寄せる波の中から、やはり先頭の十数名が寝返って、後続を迎え撃つ。地面は死屍累々ししるいゐゐで、ゾンビも躓つまずいたり滑すべったりして、方々で転倒している。

その様子を見て、黒いドレスを着た亜美あみが、手を叩いて笑っていた。恐怖しびに痺れた頭の片隅で、ぼんやりと、どういう神経をしているのかと思った。やはり、ちまたで言われていることは本当で、サイキックたちは全員サイコパスなのかもしれない。

白いドレスの美亜は、ビデオゲームに熱中している態たいで、時おり顔をしかめながらも、巧みに自分の手駒を操っていた。

「あ、あの！」

翔平は、思い切って声をかけてみる。

「何ですかあ？ 見ての通り、今、ちょっと取り込み中なんですけど」

美亜は、こちらを見ずに返事した。

「その、やつらを操れるんなら、何も殺し合いをさせないでも、ただ静かにさせておけばいいんじゃない……？」

美亜は、じろりと翔平を一瞥する。

「それができりゃ、苦労はないの！」  
すると、美亜が代わって補足する。

「あのさあ、いくらわたしたちでも、一度に操れる数は限られてるんだって。カラスだと、四、五十羽はいけるんだけど、ゾンビつつつても元は人間だからね」

「脳が複雑で意思があるぶん、十から十五が精いっぱいよ」  
奮闘中の美亜が、叫んだ。

「美亜。ちょっと代わって。……疲れた」

「もう？ バテるの早すぎない？」

「あんたも、やってみればわかるつつうの！」

美亜は、口をとがらせた。

「あいつら、とにかく、わたしたちを襲いたがってるんだよ。だから、同士討ちをさせようとしても、めっちゃ抵抗するのね。まあ、一度食いついて血の味を感じたら、その後は夢中になって、

戦い続けてくれるんだけど」

美亜は、可愛らしい外見にそぐわない、オッサンのような仕草しぐさで、地面に唾つばを吐いた。ひょっとしたら、ゾンビたちを操りながら、彼らの感覚を共有しているのだろうか。

「いいよ。じゃあ、わたしの番ね」

亜美は、一歩前に進み出た。

「殺せ。殺せ殺せ殺せ殺せ殺せえ……！ 噛かみつけ！ 引き裂け！ 目玉を潰せ！ 皆殺しだあ！」

まるでアニメの登場人物のように楽しそうな声だったが、言葉の内容は美亜よりエグい。翔平は肝が冷えた。

「殺せ殺せ殺せ殺せ……コロコロコロコロ、コロコロコロコロ……！」

亜美は、しばらくはいかにも愉快そうに殺戮さつりくのゲームに興じていたが、急に舌を出す、美亜の方を振り返る。

「美亜ー。交代」

「えっ？ 何？ 偉そうなこと言ってる、今始めたばっかじゃない！」

「まあ、時間が短いぶん、強度は上つつうか、いっぱい殺したから」

亜美は、汗を拭く仕草をして、引っ込んでしまう。すると、ゾンビたちは、いつせいに、こっちに向かって殺到してきた。しかたなく、美亜が後を引き継いだ。

先頭のゾンビたちがくると向きを変え、後続に向かって体当たりする。

最初の戦闘で学んだらしく、噛みついたり組み付いたりという複雑な動きはさせずに、全力で

頭からぶつかるだけという省エネ戦法だった。しかし、意外にそれが有効だった。文字通りの鉢合わせで頭と頭が激突すると、瞬時に双方がおシヤカになった。多少それがずれても、頭突きが顔面や胸に入った場合は、骨折などダメージは大きかった。中には、そうなくてもなお突進してくる猛者もいたが、今度はそいつを手駒にして、敵にぶつけてやればいい。

人体が激突する音がビルの谷間に反響し、あつという間に通りには死体の山が築かれていった。「美亜。やるじゃん！　そっかー。そうやりゃ、よかったのよね」

美亜が、うなずきながら声をかける。

「じゃあ、亜美もやってみてよ！」

美亜は、溜め息をついて振り返った。

「あー。なんか、頭痛がする。もうちょっと休憩」

亜美は、逃げてしまう。美亜は、口の中で何かつぶやいたが、責任感の強い性格らしく、ひたすらゾンビたちの相殺作業に没頭していた。

実際には十分足らずの出来事だっただろうが、翔平には一時間にも感じられた。

動くもののなくなった街路で、美亜が荒い息をついていた。

目の前には、うずたかく積み上がった死体の山がある。血の臭いが粘っこく鼻孔に絡みついた。どこからか、大量のハエが現れて、ご馳走の山を前に狂喜乱舞していた。

「完了」

美亜が、そう言って、恨めしそうな目で亜美を見た。

「いやあ、よくやったねえ。お姉ちゃんは、嬉しいよ」

「わたしが、お姉ちゃんだっていうの！」

美亜は、噛みついた。

「疲れたわ……もう、今日は、何もしたくない気分」

美亜は、よろめくような足取りで歩いて行く。後から、「待ってよー」と言いながら、亜美も続いた。

「あ。どこへ行くんですか？」

翔平が声をかけると、美亜は、いかにも大儀そうに振り向いた。

「帰るんだけど？」

美亜の態度には、どこか陰があった。

「ありがとうございます！ 本当に！ 感謝しています！」

翔平が心からそう言っていると、美亜は鷹揚おうえいようにうなづく。

「いいよ。気をつけて帰って。……足下が、えらく悪いけどね」

そのまま立ち去ろうとする雰囲気だった。

「あの、本当に、本当に、ありがとうございます！ 助けてもらって！」

梨奈が、大声で礼を言う。

「助けてもらって」

拓海も姉の真似をした。

「まあ、わたしたちは、自衛しただけよ。もちろん、そのついでに、あんたたちも護ったことになるけどね」

亜美が、しかつめらしく言う。

「じゃあ、そういうことで」

「待ってください！」

翔平は、とっさに声をかけた。この二人の少女が真に恐るべき超能力者であることは、たった今、目の当たりにしていた。何かのはずみで怒らせたりしたら、たちまち殺されてしまうかもしれない。その意味では、ここで別れた方が無難ではある。

だが、この先のことを考えると、そうする選択肢はなかった。

「街には、まだゾンビがたくさんいるはずですよ！ それに、悪鬼あくまもいる！ どう考えても、私たち三人だけでは、生きて帰ることはできません！」

翔平は、梨奈とさほど年の変わらない少女たちに、ひれ伏さんばかりに懇願した。

「お願いします！ 都心を抜けるところまででいいんです！ あるいは、警察か自衛隊に保護してもらえれば。どうか、それまで同行させていただけませんか？」

美亜と亜美は、顔を見合わせた。

「その、悪鬼つつうのは何？」

翔平は、少し拍子抜けした。

「今まさに都内で暴れ回っている、狂った超能力者じゃないですか？」

「ああ、あいつね」

亜美がうなずいた。

「でも、その悪鬼が相手のときは、わたしたちだって、たぶん勝ち目がないよ」

やっぱり、そうなのか。

「でも、ゾンビなら！ ゾンビの群れは、見事に撃退されましたよね？」

「撃退つつうのは、ふつつう追い払うことだろうから、ちよつと違うけど」

亜美は、顔のそばに来たハエを追い払いながら、死体の山を眺める。

「まあ、でも、気持ちはわかるかも。ねえ、どうする？」

亜美は、美亜に向かって訊ねる。

「まあ、一緒に行くのは、別にかまわないけど」

美亜は、頭痛がするようにこめかみを揉んでいた。

「ただ、あんたたちを護れるつつう保証はしないよ？」

「もちろんです！ よろしくお願いします！」

少女たちの気が変わらないうちにと、翔平は、梨奈と拓海を連れて一緒に歩き出す。

「で、お二人は、どこへ向かわれてるんですか？」

翔平が訊ねると、亜美がにやっとした。

「どこって……新宿方面？」

「へえ。そちらにお住まいなんですか？」

「そうじゃなくて、ちよつと人を探してるんだ」

「どんな方ですか？」

もし、自分の知識が役に立てるのなら、ここで少し恩を返しておくのも悪くない。

「どんな方っていうより、やつつつうか」

亜美の横顔に、さっきの殺戮の最中でも見なかったような酷薄な表情が浮かんだ。

「手塚不律っていう名前のガキなんだけどね」

げっ。新宿の魔王子じゃないか。

「……お知り合いなんですか？」

魔王子に会いに行くつもりなら、たぶん、その直前で別れた方がいいだろう。魔王子の気まぐれでオブジェにされてはたまらない。

「まあ、知り合いっちゃあ、知り合いかも」

前に行く美亜が、振り返った。

「わたしたち、手塚不律を殺しに行くの♡ 今が、唯一のチャンスだから」

八木義人は、双眼鏡で前方を確認した。今のところ、目立った動きはないようだ。

「街中の監視カメラを一元運用する手続きが、完了しました」

副官の佐竹准尉が、敬礼して報告する。

「ご苦労。トラップの方はどうだ？」

「仕掛け終わりました」

八木は、うなずいた。

これで、準備万端整った。S-3が現れたら、いつでも殲滅できる。

敵は、大量のゾンビを放つことで攪乱を狙ったようだが、ゾンビといえども、ベースが人間である以上怖くなかった。見方を変えればただの暴徒のようなものだから、自衛隊の兵器で駆除す

ることができる。

やはり、問題はS-3だった。鶏小屋フオックスメイズザヘンハウスの狐症候群の超能力者は、異常に勘が鋭くなり、ふつうの攻撃では斃たぶすことができない。正面から猛攻をかけつつ、トラップで仕留められればいいのだが、それでもまだ確信を持てなかった。

それに加えて、新宿か渋谷シブヤの魔王王子が攻撃してくれば、さすがに何とかなるだろうが、彼らが何を考えているのかはわからず、とうてい友軍と考えられる代物ではなかった。

「S-3の所在は、まだわからないのか？」

佐竹は、かぶりを振った。

「これだけ監視カメラがあるんですが、見失ってしまいました」

「顔や動作で認識できないのか？」

今の技術を使えば、二、三步歩く映像があれば、個人を特定できるはずだが。

「顔は隠しているようです。それに、どうやら、歩かずに移動しているようです……」

先刻承知ということか。

八木は、腕組みをした。

たとえば、地上すれすれを飛んでいる人間がいたとすれば、超能力者であることはわかるものの、誰かまでは特定しづらいだろう。

「普通の人間ではない動きで接近する者がいれば、すぐに教えてくれ」

「了解しました！」

佐竹は、敬礼して下がる。

とにかく、一刻も早くS-3を斃す必要があった。警察からの情報では、もしも事態が收拾困難と判断されたら、東京への核攻撃すらあり得るといふのだから。

八木は、もう一度頭の中で、トラップを作動させる順序を反芻した。

頭が痛いのは、敵の所在地がつかめないもので、どちらから来るか予測ができないという点だった。

もちろん、三百六十度どちらから襲来したとしても、対処は可能である。

しかし、わかっていれば、トラップも部隊も、最適な配置ができるのだが。

待てよ、と思う。

もし、S-3が、透明人間のように完璧に気配を消して近づけるとしたら、たいへんな事態なのかもしれない。過去のS-2、S-3はみな、狂ったように殺戮を続けながら、あてもなくさまよい歩くだけだった。だが、今回のこいつ——吉村真二朗よしむらまことは、なぜかまったく違う。徹頭徹尾冷静なのだ。

もしかすると、我々は敗北することになるかもしれない。

それは、いくら考えまいとしても頭を去らない不吉な予感だった。

ただでさえ始末に負えないS-3が、こちらと同じくらい冷静に考えて行動できるとしたら、もはや付けいる隙すきはまったくないのかもしれない……。

そのとき、銃声が響いた。近い。何があったのか。

八木は、拳銃を抜いて走り出す。周囲にいる兵士に訊ねるが、誰一人事態を把握していないようだった。

そこへ、佐竹が駆け戻ってきた。

「三時の方向より、百名ほどのゾンビが出現したようです」

ゾンビという呼称は、あつというまに定着していた。

「ただちに銃撃し、殲滅しろ。周囲に、S-3はいないのか？」

「まだ発見できておりません」

佐竹は、命令を伝えに駆け戻っていった。

また、銃声。だが、今度は、さっきとはほぼ反対方向からだ。

「ゾンビです！」

兵士の声が聞こえた。

「しかし、やつらは……！」

再び銃声。そして、苦悶の叫び声が聞こえた。

今の声は、ゾンビではない。やつらは、悲鳴は上げない。つまり、兵士がやられたことになる。

だが、相手がゾンビなら、射殺すればいいだけだ。いったい、なにがあったというのか。

「隊長！　すぐに避難してください！」

佐竹が、大声で叫びながら走ってくる。

「どうした？　何があった？」

八木も、叫び返す。

「ゾンビです。ですが、一般市民ではありません！」

「何だと？　じゃあ、何なんだ？」

「自衛官です！」

その声を最後にして、佐竹は永遠に沈黙した。一発の銃弾が、佐竹の頭部を貫通したのだった。馬鹿な。自衛官だと？ 八木は、左右を見渡しながら後退する。なぜ、いきなりそれがゾンビ化するのだ？

映画に出てくるゾンビは、ゾンビに咬かまれることによって感染し、発症する。

だが、今相手にしている代物は、ウィルス疾患ではないのだから、そうやって鼠算的に増える能力はないはずだ。すべてのゾンビは、S-3によって作られた第一世代なのだ。

全身に、ぞっと鳥肌が立った。

だとすれば、今この瞬間、S-3はすぐ傍にいる。

なぜ、すぐに攻撃を掛けてこないのかはわからない。だが、まるで我々を嘲笑あざわうかのように、自衛官をゾンビ化して、様子を見ているのだ。

どこだ？ やつは、どこにいる？

八木は、狂おしく周囲を見回した。

すでに、敗北の予感、どうしようもないほど強くなっていった。そもそもが圧倒的な力を持つ相手だというのに、こちらが奇襲攻撃を掛けられたのでは、どうしようもない。

すると、聞き覚えのある発射音がした。誰かがロケットランチャーを撃つたのだ。

振り返ると、すぐに目標はわかった。対戦車兵器を向けたのは、一人の人間にたいしてだった。だが、爆風と煙が晴れた後、その人間は無傷で立っていた。

S-3だ。八木は、息を呑のんだ。あそこにいたのか。まんまと、すぐ近くまで肉薄されてしま

った。

だが、トラップが作動さえすれば……。

S-3の周囲で、立て続けに爆発が起こった。四方八方から銃弾や金属の破片、それに毒ガスが襲う。どんな反射神経を持っていたとしても、そのすべてをかわすのは不可能なはずだった。

……しかし。

八木は、目も眩むような絶望に、その場に膝を突いてしまった。

だめだ。トラップは無効だった。S-3は、依然、無傷のままだ。

S-3は、八木の方に近づいてきた。歩いてはいない。地上十数センチの高さで、滑るように飛んでくる。たちまち、十メートルほどの距離に迫った。顔もよく見える。

吉村真二郎だ。

「いろいろな考えたようですが、結局、こんなものですか？」

吉村は、憫笑を漏らした。

「PKによる防御力というものが、まるでわかっていないようですね。同時に多方向から攻撃をしかければいいというものではないんですよ」

これが、あの吉村なのだろうか。八木は、茫然としていた。落ちこぼれの超微能力者。手塚不律を騙すための、単なる捨て駒だった男。

今、そいつは、魔王子にも匹敵する——いや、それ以上に危険な怪物と化していた。

そして、こいつは、単なるS-3でもなぞ。

やはり、単独で勝てる相手ではなかった。最低でも、手塚不律か藤倉怜央と共同作戦を採らな

ければ、どうにもならなかった。

だが、すべては終わった。

今は、こいつが手塚不律のような病的なサディストではなく、あっさりとどめを刺してくれることを祈るのみだった。

「俺の負けだ」

八木は、声を絞り出す。

「さっさと殺せ」

( )  
( )  
( )